

## 21 藍屋佐兵衛の妻と勝股元碩の妻

—青洲の乳癌患者について—

松 木 明 知

華岡青洲の業績の中では、何といても全身麻醉薬「麻沸散」の開発とそれによつて多種の、しかも当時はだれも施行出来なかつた手術を全身麻醉下で行つたことが特筆される。中でもいわゆる多くの乳癌患者を治療したことは古来広く知られている。

これは青洲による麻沸散を用いての最初の全身麻醉下の手術が、文化元年（一八〇四）十月十三日 大和五条駅 藍屋利兵衛の母「かん」に対するものであつたことに加えて、一五〇名に近い患者の姓名と治療に関係した年月日、これは初診日であるのか、手術日であるのか特定出来ないのであるが、「乳巖姓名録」として遺されていることによる。

右の姓名録に披見される患者は計一五六人であるが、

再発例、三発例があるので、実質一四七人の患者となる。

しかしこの中患者の死亡年月日が確定している例は右の藍屋かんの文化二年（一八〇五）二月二十六日のみである。逆に演者の調査によつてこの死亡年月日が確定出来た結果、かんの手術年月日が従来 of 定説より一年早い文化元年（一八〇四）十月十三日であることが証明されたのである。演者は藍屋かんについてももう少し詳しいことを知りたいと考え、改めて五条市の講御堂寺（森本師）の過去帳を昨年十月に調査し大変興味のある知見を得た。

延宝年間（一六七三〜一六八〇）から記述されている過去帳に見られる藍屋家は二系統あり、いわゆる本家と称すべき家系は名前の「・・兵衛」などから考えて、源兵衛―佐兵衛―利兵衛と続くと思われる。森本師もこのように考えるのが最も妥当であるという。しかも不思議なことに過去帳には当主と考えられる三名の法名は披見されない。

このように考えると、文化元年（一八〇四）十月に手術を受け翌二年（一八〇五）二月に死亡したかんは利兵衛の母であるから佐兵衛の妻ということになる。しかし過去

帳によると、佐兵衛の妻は安永六年（一七七七）に死亡しており（本光信女）文化二年（二八〇五）に死亡したかんは右の佐兵衛の妻とは同一人物たり得ない。

佐兵衛の死亡した子供は法名の「自光童女」「幻夢童女」から考えても年齢が少ないことが考えられ、とくに天明三年（一七八三）に死亡した佐兵衛の子供「幻夢童女」は、安永六年（一七七七）に死亡した佐兵衛の妻の実子の可能性はそんなに高くないと思われるので、かんは佐兵衛の後妻ではないかと演者は推察する。後妻であっても利兵衛の母であることに変わりはない。右の三代以降は追跡は不可である。というのは明治以降屋号から姓名に切り替えられているため、過去帳から藍屋家を追跡出来ない。

以上から利兵衛の系図について私見を提唱する。

「乳巖姓名録」は五条駅からもう一人の患者が青洲の治療を受けたことを記している。文化六年（二八〇九）の条に見える「勝股玄碩内」がそれである。今回の調査で彼女が文化九年（一八一二）六月十三日に死亡していることを、かんと同じく講御堂寺の過去帳で見出した。実は二十数年前、五条市の教育委員会の特別の御配慮で、当

時市が整備した同寺境内の墓碑群の調査台帳を入手した。演者はその中に「勝股玄碩」の名前を発見しており、この人物が、青洲の「乳巖姓名録」に出てくる「勝股玄碩」であることも知っていた。今回の調査でこれが確定出来たので、併せて報告する。

（弘前大学医学部麻酔科）